

米国から「多様性のすゝめ」

武内 宏樹

もう3年前のことになるが、洋画家の絹谷幸二氏が、2015年11月24日付の『日本経済新聞』「私の履歴書」で、子供に絵を教えるときに「絵の具はそのまま使ってはダメだよ」「ほかの色をほんの少し、混ぜてごらん」と指導するという話を紹介していた。「チューブから出したままの『赤』では、全員が同じ色」になってしまいが、違う色を混ぜることで「100人100色の『赤』ができる」、そうすることで「個性を育み、調和を尊重する」という「人間の文明の力」「知恵」が養われるというのが、絹谷氏の言わんとするところであった。

翻って、「われわれは誰かに出し抜かれている」とツイッター上で焚き付けて、社会の分断を煽っているトランプ大統領であるが、本来活力の源泉になるべき社会の多様性 (diversity) を、チューブから出したままの原色に落とし込むようなことをしている。結果として、「調和の尊重」とは正

反対の「反国際主義」(anti-internationalism) が台頭し、「保護主義」(protectionism) が「排外主義」(xenophobia)・*xen*には「人種差別主義」(racism) にまでエスカレートしてしまった。トランプ政権から「知恵」のかけらも出てこないのも宜なるかなである。

話は変わるが、10月11日に横浜DeNAベイスターズのアレックス・ラミレス監督の続投が発表された。一方、ラミレス氏と同じ2015年のオフシーズンに就任した、阪神タイガースの金本知憲監督と読売ジャイアンツの高橋由伸監督は今シーズン限りで辞任することになった。金本、高橋、ラミレスの3監督はいずれも外野手出身で、40歳代の監督という共通点があつて注目していたのであるが、コミュニケーション能力が心配されたラミレス監督の評価が当時は一番低かったと記憶している。ところが、蓋を開けてみると、二回りほど年が離れた若い選手とのコミュニケーションに

苦しんだのは、現役時代にスーパースターとして別格の待遇を受けてきた金本監督と高橋監督であった。特に、昔ながらの体育会的鬼軍曹タイプの金本監督は、就任時にエースだった藤浪晋太郎投手をはじめ、選手とまったくと言つていいほどコミュニケーションが取れていないように見えた。逆に、ラミレス監督は選手の掌握術に長け、昨年クライマックス・シリーズを勝ち抜いて日本シリーズに出場したときには、選手とのコミュニケーション能力が快進撃の原動力と賞賛さえされた。日本語が母語ではないラミレス監督が日本人選手とのコミュニケーションに長けているというのには意外に思うかもしれない。ラミレス監督にしてみれば、共有していることが少ない分だけ、相手にわかるように説明するとか、自身の考えをエビデンスで裏付けるといふ、自身の考えや意志を伝えるための「基本動作」がとりわけ大事になるのである。筆者も経験があるが、コミュニケーション能力というのは「阿吽の呼吸」が通じないところでこそ磨かれるのである。日本人は、国際会議などで考えを表明して他者を説得することが下手だといわれる。英語ができないせいだと考えられているが、そうではない。基本的なコミュニケーション能力が身につけていないといふべきである。上下関係が幅を利かす日本社会では、筋の通った考えだからというのではなく、年齢が上の人や地

位の高い人の意見だということ、それが少々理屈に合わなくても通ず風潮がある。これでは個性を招き、多様性は生まれ得ない。

コミュニケーション能力を身につけるにはトレーニングが必要である。コミュニケーションの基盤はまず、相手の言うことをよく聴くこと、次に自分の考えを経験的事実と照らし合わせて論理的に説明するという作業にある。自分のやってきたことを説明もなしに押しつけるやり方では個性を育むこともできないし、知恵も生まれてこない。多様性というのは自己満足というぬるま湯に浸っていた人にとっては苦痛なのである。多様性がアイデンティティを脅かすと感じている人にとつては、コミュニケーションの基礎である「礼節」(civility) に攻撃の矛先を向けるトランプ氏の自国第一主義は心に響くのであろう。もちろん、アイデンティティを失わずに多様性を受け入れることこそが、グローバル化が進む世界では必須であり、これからの時代はそれに尽きるのである。グローバル化は本来、人間の限界を取り除き、新たな可能性に気づかせてくれるものなのであるが、このためにもコミュニケーション能力を身につけ、高め、それぞれの集団の制約条件の中で問題解決に努めることが、リーダーや知識人の務めである。

サザンメソジスト大学 (SMU) 准教授